

ホモイはあまり胸がどきどきするのであの貝の火を見ようと函を出して蓋を開きました。それはやはり火のやうに燃えて居りました。けれども氣のせいひとこころか一所ひとところ小さな針でついた位の白い曇りが見えるのです。

ホモイはどうもそれが氣になつて仕方ありませんでした。そこでいつものやうにフツフツと息をかけて、紅雀ベニすずめの胸毛で上を軽くこすりました。けれども、どうもそれがとれないのです。その時、お父さんが歸つて來ました。そしてホモイの顔色が變つてゐるのを見て言ひました。

「ホモイ。貝の火が曇つたのか。大變お前の顔色が悪いよ。どれお見せ。」そして珠をすかして見て笑つて言ひました。

「なあにすぐ除とれるよ。黄色の火なんか却かつて今迄より餘計燃えてゐる位だ。どれ。紅雀の毛を少しお呉れ。」そしてお父さんは熱心にみがきはじめました。けれどもどうも曇りがとれるどころか、段段大きくなるらしいのです。

お母さんが歸つて參りました。そして黙つてお父さんから貝の火を受け取つてすかして

見てため息をついて、今度は自分で息をかけてみがきました。

實にみんな、だまつてため息ばかりつきながら交かはる交かはる一生懸命がいたのです。もう夕方になりました。お父さんにはかに氣がついたやうに立ちあがつて、

「まあ、ご飯を食べよう。今夜一晩油に漬けて置いて見る。それが一番いいといふ話だ。」と言ひました。お母さんはびつくりして、

「まあ、ご飯の支度を忘れてゐた。なんにもこさへてない。一昨日のすすらの實と今朝のパンだけを喰くべませうか。」と言ひました。

「うんそれでいいさ。」とお父さんが言ひました。ホモイはため息をついて珠を函はこに入れてじつとそれを見詰まりました。

みんなは、だまつてご飯をすましました。

お父さんは、「どれ、油を出してやるかな。」と言ひながら棚からかやの實あまごの油あぶらの瓶びんをおろしました。

ホモイはそれを受けとつて貝の火を入れた函はこに注つぎました。

そしてあかりをけしてみんな早くからねてしまひました。

夜中にホモイは眼をさましました。

そしてこはごは起きあがつてそつと枕まくらもとの貝の火を見ました。貝の火は油の中で魚の眼玉のやうに銀色に光つてゐます。もう赤い火は燃えてゐませんでした。

ホモイは大聲で泣き出しました。兎のお父さんやお母さんがびつくりして起きてあかりをつけました。

貝の火はまるで鉛なまりの珠たまのやうになつてゐます。ホモイは泣きながら狐の網のはなしをお父さんにしました。お父さんは大變あわてて、急いで着物をきかへながら言ひました。

「ホモイ。お前は馬鹿だぜ。俺も馬鹿だつた。お前はひばりの子供の命を助けてあの珠を貰つたのぢやないか。それをお前は一昨日なんか生れつきだなんて言つてゐた。さあ、野原へ行かう。狐がまだ網を張つて居るかもしれない。お前はいのちがけで狐とたたかふんだぞ。勿論おれも手傳ふ。」

ホモイは泣いて立ちあがりました。兎のお母さんも泣いて二人の後を追ひました。

霧がポシヤポシヤ降つて、もう夜があけかかつてゐます。

狐はまだ網あみをかけて、樺かばの木の下に居ました。そして三人を見て口を曲げて大聲でわらひました。ホモイのお父さんが叫びました。

「狐。お前はよくもホモイをだましたな。さあ決闘けつとうをしろ。」

狐が實まことに悪黨あくたうらしい顔をして言ひました。

「へん。貴様きさまら三疋ばかり食ひ殺してやつてもいいが、俺もけがでもするとつまらないや。おれはもつといひ食べものがあるんだ。」そして箱をかついで逃げ出さうとしました。

「待てこら。」とホモイのお父さんがガラスの箱を押へたので、狐はよろよろしてとうとう箱を置いたまま逃げて行つてしまひました。

見ると箱の中に鳥が百疋ばかり、みんな泣いてゐました。雀すずめやかけすやうぐひすは勿論、大きな大きな梟ふくろうや、それにひばりの親子までがはいつてゐるのです。ホモイのお父さんは蓋おたをあけました。鳥がみんな飛び出して地面に手をついて聲をそろへて言ひました。

「ありがたうございます。ほんたうに度度おかけ様でございます。」するとホモイのお父

さんが申しました。

「どう致しまして、私共は面目次第もございません。あなた方の王さまからいただいた珠をとらうと曇らしてしまつたのです。」鳥が一遍に言ひました。

「まあどうしたのでせう。どうか一寸拜見いたしたいものです。」

「さあどうぞ。」と言ひながらホモイのお父さんはみんなをうちの方へ案内しました。鳥はぞろぞろついて行きました。ホモイはみんなのあとを泣きながらしよんぼりついて行きました。梟が大股にのつそのつそと歩きながら時々こわい眼をしてホモイをふりかへつて見ました。みんなはおうちに入りました。

鳥は、ゆかや棚や机やうちのあらゆる場所をふさぎました。梟が眼玉を途方もない方に向けながら、しきりに「オホン、オホン」とせきばらひをします。ホモイのお父さんがただの白い石になつてしまつた貝の火を取りあげて、

「もうこんな工合です。どうか澤山笑つてやつて下さい。」と言ふとたん、貝の火は鋭くカチツと鳴つて二つに割れました。

と思ふと、パチパチパチツと烈しい音がして見る見るまるで煙のやうに碎けました。

ホモイが入口でアツと言つて倒れました。目にその粉が入つたのです。みんなは驚いてそつちへ行かうとしますと、今度はそつちに、ピチピチピチと音がして煙がだんだん集まり、やがて立派ないくつかのかけらになり、おしまひにカタツと二つかけらが組み合つてすつかり昔の貝の火になりました。珠はまるで噴火のやうに燃え、夕日のやうにかがやき、ヒューと音を立てて窓から外の方へ飛んで行きました。鳥はみな興をさまして、一人去り二人去り今はふくろふだけになりました。ふくろふはじろじろ室の中を見まはしながら、

「たつた六日だつたな。ホッホ。」

とあざ笑つて肩をゆすぶつて大股に出て行きました。

それにホモイの日は、もうさつきの珠のやうに白く濁つてしまつて、まつたく物が見えなくなつたのです。

はじめからおしまひまでお母さんは泣いてばかり居ました。お父さんが腕を組んでちつ

と汚へてゐましたが、やがてホモイのせなかを静かに叩いて言ひました。

「泣くな。こんなことはどこにもあるのだ。それをよくわかつたお前は一番さいはひなのだ。目はきつと又よくなる。お父さんがよくしてやるから、な。泣くな。」窓の外では霧が霽れて鈴蘭の葉がきらきら光り、つりがねさうは、

「カン　カン　カンカエコ　カンコカンコカン。」と朝の鐘を高く鳴らしました。

オツベルと象

ある牛飼ひがものがたる

第一日曜

オツベルときたら大したもんだ。稲扱器械の六臺も据ゑつけて、のんのんのんののののんと、大そろしない音をたててやつてゐる。

十六人の百姓どもが、顔をまるつきりまつ赤にして、足で踏んで器械をまはし、小山のやうに積まれた稲を片つばしから扱いて行く。藁はどんどんうしろの方へ投げられて、また新しい山になる。そこらは糞や藁から發つたこまかな塵で、變にぼうつと黄いろになり、まるで沙漠のけむりのやうだ。

そのうすくらしい仕事場で、オツペルは、大きな琥珀のパイプをくはへ、吹殻を藁に落さないやう、眼を細くして氣をつけながら、両手を背中に組みあはせて、ぶらぶら往つたり來たりする。

小屋はすゐぶん頑丈で、學校ぐらゐもあるのだが、何せ新式稻扱器械が六臺もそろつてまはつてるから、のんのんのんふるふのだ。中にはいるとそのために、すつかり腹が空くほどだ。そしてじつさいオツペルは、そいつで上手に腹をへらし、ひるめしどきには、六寸ぐらゐのビフテキの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのをたべるのだ。とにかく、さうして、のんのんのんやつてゐた。

そしたらそこへどういふわけか、その、白象がやつて來た。白い象だぜ、ペンキを塗つたのでないぜ。どういふわけで來たかつて？ そいつは象のことだから、たぶんぶらつと森を出て、ただなんとなく來たのだらう。

そいつが小屋の入口に、ゆつくり顔を出したとき、百姓どもはぎよつとした。なぜぎよつとした？ よくきくねえ、何をしだすか知れないぢやないか。かかり合つては大へんだ

から、どいつもみんな、いつしやうけんめい、じぶんの稻を扱いてゐた。

ところがそのときオツペルは、ならんだ器械のうしろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらつと鋭く象を見た。それからすばやく下を向き、何でもないといふふうで、いままでどほり往つたり來たりしてゐたもんだ。

するとこんどは白象が、片脚床にあげたのだ。百姓どもはぎよつとした。それでも仕事がか忙しいし、かかり合つてはひどいから、そつちを見ずに、やつぱり稻を扱いてゐた。

オツペルは奥のうすくらしいところで、両手をポケットから出して、も一度ちらつと象を見た。それからいかにも退屈さうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭のうしろに組んで、往つたり來たりやつてゐた。ところが象が威勢よく、前肢二つつきだして、小屋にあがつて來ようとする。百姓どもはぎくつとし、オツペルもすこしぎよつとして、大きな琥珀のパイプから、ふつとけむりをはきだした。それでもやつぱりしらないふうで、ゆつくりそこらにあるいてゐた。

そしたらとうとう、象がこのこ上つて來た。そして器械の前のところを、吞氣にあるき

はじめたのだ。

ところが何せ、器械はひどく廻つてゐて、靱は夕立か霰のやうに、パチパチ象にあたるのだ。象はいかにもうるさいらしく、小さなその眼を細めてゐたが、またよく見ると、たしかに少しわらつてゐた。

オツペルはやつと覺悟をきめて、稻扱器械の前に出て、象に話をしようとしたが、そのとき象が、とてもきれいな驚みたくないいい聲で、こんな文句を言つたのだ。

「ああ、だめだ。あんまりせはしく、砂がわしの齒にあたる。」

まつたく靱は、パチパチパチ齒にあたり、またまつ白な頭や首にぶつつかる。

さあ、オツペルは命懸けだ。パイプを右手にもち直し、度胸を据ゑて斯う言つた。

「どうだい、ここは面白いかい。」

「面白いねえ。」象がからだを斜めにして、眼を細くして返事した。

「ずうつとこつちに居たらどうだい。」

百姓どもははつとして、息を殺して象を見た。オツペルは言つてしまつてから、にはか

にがたがた顫へ出す。ところが象はけろりとして、

「居てもいいよ。」と答へたもんだ。

「さうか。それではさうしよう。さういふことにしようぢやないか。」オツペルが顔をくしやくしやにして、まつ赤になつて悦びながらさう言つた。

どうだ、さうしてこの象は、もうオツペルの財産だ。いまに見たまへ、オツペルは、あの白象を、はたらかせるか、サーカス團に賣りとばすか、どつちにしても萬圓以上もうじけるぜ。

第二日曜

オツペルときたら大したもんだ。それにこの前、稻扱小屋でうまく自分のものにした、象もじつさい大したもんだ。力も二十馬力もある。第一みかけがまつ白で、牙はぜんたいきれいな象牙でできてゐる。皮も全體、立派で丈夫な象皮なのだ。そしてずるぶんはたらくもんだ。けれどもそんなに稼ぐのも、やつぱり主人が偉いのだ。

「おい、お前は時計は要らないか。」丸太で建てたその象小屋の前に来て、オツベルは琥珀のパイプをくはへ、顔をしかめて斯う訊いた。

「ぼくは時計は要らないよ。」象がわらつて返事した。

「まあ持つて見る、いいもんだ。」斯う言ひながらオツベルはブリキでこさへた大きな時計を、象の首からぶら下げた。

「なかなかいいね。」象も言ふ。

「鎖もなくちやだめだらう。」オツベルときたら、百キロもある鎖をさ、その前肢にくつつけた。

「うん、なかなか鎖はいいね。」三あし歩いて象が言ふ。

「靴をはいたらどうだらう。」

「ぼくは靴などはかないよ。」

「まあはいてみる、いいもんだ。」オツベルは顔をしかめながら、赤い張子の大きな靴を象のうしろのかかとはめた。

「なかなかいいね。」象も言ふ。

「靴に飾りをつけなくちや。」オツベルはもう大急ぎで二百キロある分銅を靴の上から穿め込んだ。

「うん、なかなかいいね。」象は二あし歩いてみて、さもうれしそうに言つた。

次の日、ブリキの大きな時計と、やくざな紙の靴とはやぶけ、象は鎖と分銅だけで大よるこびであるいて居つた。

「濟まないが税金も高いから、今日はすこうし、川から水を汲んでくれ。」オツベルは両手をうしろで組んで顔をしかめて象に言ふ。

「ああ、ぼく水を汲んで来よう。もう何ばいでも汲んでやるよ。」

象は眼を細くしてよろこんで、そのひるすぎに五十だけ、川から水を汲んで来た。そして菜つ葉の畑にかけた。夕方象は小屋に居て、十把の藁をたべながら、西の三日の月を見て、

「ああ、稼ぐのは愉快だねえ、さつぱりするねえ。」と言つてゐた。

「濟まないが税金がまたあがる。今日は少うし森から、たきぎを運んでくれ。」オツベルは房のついた赤い帽子をかぶり、両手をかくしにつつ込んで、次の日象にさう言つた。

「ああ、ぼくたきぎを持つて来よう。いい天気だねえ。ぼくはぜんたい森へ行くのは大すきなんだ。」象はわらつてかう言つた。

オツベルは少しきよつとして、パイプを手からあぶなく落しさうにしたが、もうそのときは、象がいかに愉快なふうで、ゆつくりあるきだしたので、また安心してパイプをくはへ、小さな咳を一つして、百姓どもの仕事の方を見に行つた。

そのひるすぎの半日に、象は九百把たきぎを運び、眼を細くしてよろこんだ。

晩方象は小屋に居て、八把の藁をたべながら、西の四日の月を見て、

「ああ、せいせいした、サンタマリア。」と斯うひとりごとしたさうだ。

その次の日だ。

「濟まないが、税金が五倍になつた、今月は少うし鍛冶場へ行つて、炭火を吹いてくれなうか。」

「ああ吹いてやらう。本気でやつたら、ぼく、もう、息で石もなげとばせるよ。」

オツベルはまたどきつとしたが、氣を落ちつけてわらつてゐた。

象はそのそ鍛冶場へ行つて、べたんと肢を折つて坐り、ふいごの代りに半日、炭を吹いたのだ。

その晩、象は象小屋で、七把の藁をたべながら、空の五日の月を見て、

「ああつかれたな、うれしいな、サンタマリア。」と斯う言つた。

どうだ、さうして次の日から、象は朝からかせぐのだ。藁も昨日はただ五把だ。よくまあ、五把の藁などで、あんな力がでるもんだ。

じつさい象はけいさいだよ。それといふのもオツベルが、頭がよくてえらいためた。オツベルときたら大したもんさ。

第五日曜

オツベルかね。そのオツベルは、おれも言はうとしてたんだが、居なくなつたよ。

まあ落ちついてききたまへ。前にはなしたあの象を、オツベルはすこしひどくし過ぎた。しかたがだんだんひどくなつたから、象はなかなか笑はなくなつた。時には赤い龍の眼をして、ちつとこんなにオツベルを見おろすやうになつてきた。

ある晩、象は象小屋で、三把の薬をたべながら、十日の月を仰ぎ見て、

「苦しいです。サンタマリア。」と言つたといふことだ。

こいつを聞いたオツベルは、ことごと象につらくした。

ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに坐り、薬もたべずに、十一日の月を見て、

「もう、さようなら、サンタマリア。」

と斯う言つた。

「おや、何だつて？ さよならだ？」

月が俄かに象に訊く。

「ええ、さよならです。サンタマリア。」

「何だい、なりばかり大きくて、からつきし意氣地のないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいいや。」月がわらつて斯う言つた。

「お筆も紙ありませんよう。」象は細うい、きれいな聲で、しくしくしく泣き出した。

「そら、これでせう。」すぐ眼の前で、可愛い子どもの聲がした。象が頭を上げて見ると、赤い着物の童子が立つて、硯と紙を捧げてゐた。象は早速手紙を書いた。

「ぼくはすゐぶんな目にあつてゐる。みんな出て来て助けてくれ。」

童子はすぐに手紙をもつて、林の方へあるいて行つた。

赤衣の童子が、さうして山に着いたのは、ちやうどひるめしごろだつた。

このとき山の象どもは、沙羅樹の下のくらがりで、碁などをやつてゐたのだが、額をあとめてこれを見た。

「ぼくはすゐぶんな目にあつてゐる。みんな出て来て助けてくれ。」

象は一せいに立ちあがり、まつ黒になつて吠えだした。

「オツペルをやつつけよう。」議長の象が高く叫ぶと、

「おう、でかけよう。グララアガア　グララアガア。」みんながいちどに呼應する。

さあ、もうみんな、嵐のやうに林の中をつきぬけて、グララアガア　グララアガア、野原の方へとんで行く。どいつもみんなきちがひだ。小さな木などは根こぎになり、藪や何かもめちやめちやだ。グワアグワア　グワアグワア、花火みたいに野原の中へ飛び出した。それから、何の、走つて、走つて、とうとう向ふの青くかすんだ野原のはてに、オツペルの邸の黄いろな屋根を見つけると、象はいちどに噴火した。

グララアガア　グララアガア。その時はちやうど一時半、オツペルは皮の寝臺の上で、ひるねのさかりで、烏の夢を見てゐたものだ。あまり大きな音なので、オツペルの家の百姓どもが、門から少し外へ出て、小手をかざして向ふを見た。林のやうな象だらう。汽車より早くやつてくる。さあ、まるつきり、血の氣も失せてかけ込んで、「旦那あ、象です。押し寄せやした。旦那あ、象です。」と聲をかぎりに叫んだもんだ。

ところがオツペルはやはりえらい。眼をぱつちりとあけたときは、もう何もかもわかつてゐた。

「おい、象のやつは小屋にゐるのか。居る？　居る？　居るのか。よし、戸をしめる。戸をしめるんだよ。早く象小屋の戸をしめるんだ。ようし早く丸太まるたを持つて来い。とちこめちまへ、畜生め、ちたばたしやがるな、丸太をそこへしぱりつけろ。何ができるもんか。わざと力を減らしてゐるんだ。ようし、もう五六本持つて来い。さあ、大丈夫だとも。あわてるなつたら。おい、みんな、こんどは門だ。戸をしめろ。かんぬきをかへ。つつぱり。つつぱり、さうだ。おい、みんな心配するなつたら。しつかりしろよ。」オツペルはもう支度ができて、ラツパみたくないで、百姓どもをはげました。ところがどうして、百姓どもは氣が氣ぢやない。こんな主人に巻き添まきぞひなんぞ食ひたくないから、みんなタオルやハンケチや、よごれたやうな白いやうなものを、ぐるぐる腕に巻きつける。降参をするしるしなのだ。

オツペルはいよいよやつきとなつて、そこらあたりをかけまはる。オツペルの犬も氣が立つて、火のつくやうに吠えながら、やしきの中をはせまはる。

間もなく地面はぐらぐらとゆられ、そこらはばしやばしやくらくなり、象はやしきをと
りまいた。グララアガア、グララアガア、その恐ろしいさわぎの中から、

「今助けるから安心しろよ。」やさしい聲もきこえてくる。

「ありがたう。よく来てくれた、ほんとに僕はうれしいよ。」象小屋からも聲がする。さ
あ、さうすると、まはりの象は一そうひどく、グララアガア、グララアガア、塀のまはり
をぐるぐる走つてゐるらしく、度度中から怒つてふりまはす鼻も見える。けれども塀は
セメントで、中には鐵も入つてゐるから、なかなか象もこはせない。塀の中にはオツベル
が、たつた一人で叫んでゐる。百姓どもは眼もくらみ、そこらをうろろするだけだ。そ
のうち象どもは、仲間のからだを臺にして、いよいよ塀を越えかかる。だんだん、にゆう
と顔を出す。その緘くちやで灰いろの、大きな顔を見あげたとき、オツベルの犬は氣絶し
た。さあ、オツベルは射ちだした。六連發のピストルさ。ドーン、グララアガア、ドーン
グララアガア、ドーン、グララアガア、ところが彈丸は通らない。牙にあたればはねかへ
る。一疋なぞは斯う言つた。

「なかなかこいつはうるさいねえ。ばちばち顔へあたるんだ。」オツベルはいつかどつか
で、こんな文句をきいたやうだと思ひながら、ケースを帯からつめかへた。そのうち、象
の片脚が、塀からこつちへはみ出した。それからも一つはみ出した。五疋の象が一ぺん
に、塀からどつと落ちて來た。オツベルはケースを握つたまま、もうくしやくしやに漬れ
てゐた。早くも門があいたので、グララアガア、グララアガア、象がどしどしなだれ込む。
「半はどこだ。」みんなは小屋に押しよせる。丸太なんぞは、マッチのやうにへし折られ、
あの白象は大へん渡せて小屋を出た。

「まあ、よかつたね、やせたねえ。」みんなはしづかにそばにより、鎖と分銅をはづして
やつた。

「ああ、ありがたう。ほんとにぼくは助かつたよ。」
白象はさびしくわらつてさう言つた。

.....
おや、君、川へはいつちやいけないつたら。

雁の童子

流沙の南の、楊で囲まれた小さな泉で、私は、炒つた麥粉を水にといて、晝の食事をして居りました。

そのとき、一人の巡禮のおぢいさんが、やつぱり食事のために、そこへやつて來ました。私たちはだまつて軽く禮をしました。

けれども、半日まるつきり人にも出會はないそんな旅でしたから、私は食事がすんでも、すぐに泉とその年老つた巡禮とから、別れてしまひたくはありませんでした。

私はしばらくその老人の、高い咽喉佛のぎくぎく動くのを、見るともなしに見てゐました。

何か話し掛けたいと思ひましたが、どうもあんまり向ふが寂かなので、私は少しきゆうく

つにも思ひました。

けれども、ふと、私は泉のうしろに、小さな祠のあるの見つけました。それは大へん小さくて、地理學者や、探險家ならばちよつと標本に持つて行けさうなものではありませんが、黄いろと赤のペンキさへ塗られていかにも異様に思はれ、まだ全くあたらしく、その前には、粗末ながらも一本の幡も立つてゐました。

私は老人が、もう食事も終りさうなのを見てたづねました。

「失禮ですが、あのお堂はどなたをおまつりしたのですか。」

その老人も、たしかに何か、私に話しかけたくてゐたのです。だまつて二三度うなづきながら、そのたべものをのみ下して、低く言ひました。

「童子のです。」

「童子つてどういふ方ですか。」

「雁の童子と仰つしやるのは。」老人は食器をしまひ、屈んで泉の水をすくひ、きれいに口をすすいでから又言ひました。

「雁の童子と仰つしやるのは、まるでこの頃あつた昔ばなしのやうなのです。この地方にそのころ降りられました天の童子だといふのです。このお堂はのころ流沙の向ふ側にも、あちこち建つて居ります。」

「天のこどもが降りたのですか。罪があつて天から流されたのですか。」

「さあ、よくわかりませんが、よくこの邊でさう申します。多分さうでございませう。」

「いかがでせう、聞かせて下さいませんか。お急ぎでさへなかつたら。」

「いいえ。急ぎはいたしません。私の聴いただけをお話いたしませう。」

沙車に、須利耶圭といふ人がございました。名門ではございましたさうですが、おちぶれて奥さまと二人で、自分は昔からの寫經をなさり、奥さまは機を織つて、しづかにくらしてゐられました。

ある明方、須利耶さまが鐵砲をもつたご自分の從弟の方とご一緒に、野原を歩いてゐられました。

地面はごく麗はしい青い石で、空がぼおつと白く見え、雪もま近でございました。

須利耶さまがお從弟さまに仰つしやるには、お前もさやうな慰みの殺生を、もういい加減やめたらどうだと、斯うでございました。

ところが從弟の方が、まるですげなく、やめられないと、ご返事です。

（お前はすゐぶんむごいやつだ、お前の傷めたり殺したりするものが、一體どんなものかわかつてゐるか、どんなものでもいのちは悲しいものなのだぞ。）と、須利耶さまは重ねておさとしになりました。

（さうかもしれないよ。けれどもさうでないかもしれない。さうだとすればおれは一層おもしろいのだ。まあそんな下らない話はやめろ、そんなことは昔の坊主どもの言ふこつた、見る。向ふを雁が行くだらう、おれは仕止めて見せる。）と、從弟の方は鐵砲を構へて、走つて見えなくなりました。

須利耶さまは、その大きな黒い雁の列をぢつと、眺めて立たれました。

そのとき俄かに向ふから黒い尖つた彈丸が昇つて、まつ先きの雁の胸を射ました。

雁は二三べん揺らぎました。見る見るからだに火が燃え出し、世にも悲しく叫びながら、落ちて参つたのでございます。

弾丸が又昇つて次の雁の胸をつらぬきました。それでもどの雁も、遁げはいたしませんでした。却つて泣き叫びながらも、落ちて来る雁に随ひました。

第三の弾丸が昇り、

第四の弾丸が又昇りました。

六發の弾丸が六疋の雁を傷つけました、一ばんしまひの小さな一疋丈けが、傷つかずに残つてゐたのでございます。燃え叫ぶ六疋は、悶えながら空に沈み、しまひの一疋は泣いて随ひ、それでも雁の正しい列は、決して亂れはいたしません。

そのとき須利耶さまの愕ろきには、いつか雁がみな空を飛ぶ人の形に變つて居りました。赤い焰に包まれて、歎き叫んで手足をもだえ、落ちて参る六人、それからしまひに只一人、完いものは可愛らしい天の子供でございました。

そして須利耶さまは、たしかにその子供に見覚えがございました。最初のもは、もは

や地面に達します。それは白い鬚の老人で、倒れて燃えながら、骨立つた両手を合せ、須利耶さまを拜むやうにして、切なく叫びますのには、

(須利耶さま、須利耶さま、おねがひでございます。どうか私の孫をお連れ下さいませ。) もちろん須利耶さまは、馳せ寄つて中されました。

(いゝとも、いゝとも、確かにおれが引き取つてやらう。しかし一體お前らは、どうしたのだ。)

そのとき次々に雁が地面に落ちて来て燃えました。大人もあれば美しい嬰瓔をかけた女子もございました。その女子はまつかな焔に燃えながら、手をあのおしまひの子にのぼし、子供は泣いてそのまはりをはせめぐつたと申します。雁の老人が重ねて申しますには、

(私共は天の眷屬でございます。罪があつてただいままで雁の形を受けて居りました。只今報いを果しました。私共は天に歸ります。ただ私の一人の孫はまだ歸れません。これはあなたとは縁のあるものでございます。どうぞあなたの子にしてお育てを願ひます。おねがひでございます。) と斯うでござります。

須利耶さまが申されました。

(いいとも。すつかり判つた。引き受けた。安心して呉れ。)

すると老人は手を擦つて地面に頭を垂れたと思ふと、もう燃えきつて、影もかたちもございませんでした。

須利耶さまも、従弟さまも鐵砲をもつたままぼんやりと立つてゐられましたさうで、いつたい二人いつしよに夢を見たのかとも思はれましたさうですが、

あとで従弟さまの申されますには、その鐵砲はまるで熱く、彈丸は滅つて居り、そのみんなのひざまづいた所の草はたしかに倒れて居つたさうでございませう。

そしてもちろんそこにはその童子が立つてゐられませんでしたのです。

須利耶さまはわれにかへつて童子に向つて言はれました。

(お前は今日からおれの子供だ、もうそんなに泣かないでいい。お前の前のお母さんや兄さんたちは、立派な國に昇つて行かれた。さあおいで。)

須利耶さまはごじぶんのうちへ戻られました。途中の野原は青い石でしんとして子供は

きながら隨つて参りました。

須利耶さまは奥さまとご相談で、何と名前をつけようか、三四日お考へでございましたが、そのうち、話はもう沙車全體にひろがり、みんなは子供を雁の童子と呼びましたので、須利耶さまも仕方なくさう呼んでおいででございました。

老人はちはつと息を切りました。私は足もとの小さな苔を見ながら、この怪しい、空から落ちて赤い焰につつまれかなしく燃えて行く人たちの姿を、はつきりと思ひ浮べました。老人はしばらく私を見てゐましたが、又語りつづけました。

「沙車の春の終りには、野原いちめん楊の花が光つて飛びます。遠くの氷の山からは、白い何とも言へず腫を痛くするやうな光が、日光の中を這つてまゐります。それから果樹がちらちらゆすれ、ひばりはそらですきとほつた波をたてます。童子は早くも六つになられました。春のある夕方のこと、須利耶さまは雁から来たお子さまをつれて、町を通つて参られました。葡萄いろの重い雲の下を、影法師の蝙蝠がひらひらと飛んで過ぎました。子供らが長い棒に紐をつけてそれを追ひました。

雁の童子だ。雁の童子だ。

子供らは棒を棄て手をつなぎ合つて大きな環になり、須利耶さま親子を囲みました。

須利耶さまは笑つておいででございました。

子供らは聲を揃へていつものやうにはやします。

(雁の子、雁の子、雁童子、)

空から須利耶におりて来た。) と斯うでございます。

けれど一人の子供が冗談に申しますには、

(雁のすてご、雁のすてご)

春になつてもまだ居るか。)

みんなはどつと笑ひましてそれからどういふわけか、小さな石が一つ飛んで来て童子の頬を打ちました。須利耶さまは童子をかばつてみんなに申されますのは、

(おまへたちは何をするんだ。この子供は何か悪いことをしたか。冗談にも石を投げるなんていけないぞ。)

子供らが叫んでばらばら走つて来て童子に詫びたり、慰めたりいたしました。或る子は前掛けの衣囊から、干した無花果を出して遣らうといたしました。

童子は初めからお了ひまでにここに笑つて居られました。須利耶さまもお笑ひになりみんなを赦して童子を連れて其處をはなれなさいました。

そして淺黄の瑪瑙の、しづかな夕もやの中で言はれました。

(よくお前はさつき泣かなかつたな。)

その時童子はお父さまにすがりながら、

(お父さん、わたしの前のおぢいさんはね、からだに彈丸を七つ持つてゐたよ。) と斯う申されたと傳へます。

巡禮の老人は私の顔を見ました。

私もちつと老人のうるんだ眼を見あげて居りました。老人は又語りつづけました。

「又或る晩のこと童子は、寝つけないでいつ迄も床の上でもがきなさいました。

(おつかさん、ねむられないよう。) と仰つしやいます。

須利耶の奥さまは立つて行つて靜かに頭を撫でておやりなさいました。

童子さまの脳はもうすっかり疲れて、白い網のやうになつて、ぶるぶるゆれ、その中に赤い大きな三日月が浮かんだり、そのへん一杯にぜんまいの芽のやうなものが見えたり、また四角な變に柔らかな白いものが、だんだん擴がつて恐ろしい大きな箱になつたりするのでございました。

母さまはその額が餘り熱いといつて心配なさいました。

須利耶さまは寫しかけの經文に、掌を合せて立ちあがられ、それから童子さまを立たせて、紅革の帯を結んでやり表へ連れてお出になりました。驛のどの家ももう戸を閉ぢてしまつて、一面の星の下に、棟棟が黒く列びました。その時童子はふと水の流れる音を聞かれました。そしてしばらく考へてから、

(お父さん、水は夜でも流れるのですか。)とお尋ねです。須利耶さまは沙漠の向ふから昇つて來た大きな青い星を眺めながらお答へなされます。

(水は夜でも流れるよ。水は夜でも晝でも、平らな所でさへなかつたら、いつ迄もいつ迄

も流れるのだ。)

童子の脳は急にすっかり靜まつて、そして今度は早く母さまの處へお歸りになりたうなります。

(お父さん。もう歸らうよ。)と申されながら須利耶さまの袂を引つ張りなさいます。お

二人は家に入り、母さまが迎へなされて戸の環を箆めてゐられますうちに、童子はいつかご自分の床に登つて、着換もせずにくつすり眠つてしまはれました。

又次のやうなことも申します。

ある日須利耶さまは童子と食卓にお坐りなさいました。食品の中に、蜜で煮た二つの鮎がございました。須利耶の奥さまは、一つを須利耶さまの前に置かれ、一つを童子にお與へなされました。

(喰べたくないよ。おつかさん。)童子が申されました。

(おいしいのだよ。どれ、箸をお貸し。)須利耶の奥さまは童子の箸をとつて、魚を小さく碎きながら、

(さあおあがり、おいしいよ。)と勧められます。

童子は母さまの魚を砕く間、ちつとその横顔を見ておられました。俄かに胸が變な工合に迫つて来て、氣の毒なやうな悲しいやうな、何とも堪らなくなりました。くるつと立つて鐵砲玉のやうに外へ走つて出られました。

そしてまつ白な雲の一杯に充ちた空に向つて、大きな聲で泣き出しました。まあどうしたのでせう、と須利耶の奥さまが愕ろかれます。どうしたのだらう、行つて見ると、須利耶さまも氣づかれます。そこで須利耶の奥さまは戸口にお立ちになりましたら、童子はもう泣きやんで笑つておられましたと、そんなことも申し傳へます。

又ある時須利耶さまは童子をつれて、馬市の中を通られましたら、一疋の仔馬が乳をのんで居つたと申します。

黒い粗布を着た馬商人が来て、仔馬を引きはなしてもう一疋の仔馬に結びつけ、そして黙つてそれを引いて行かうと致します。

母親の馬はびつくりして高くなきました。けれども仔馬はぐんぐん連れて行かれます。向ふの角を曲らうとして、仔馬は急いで後肢を一方あげて、腹の蠅を叩きました。

童子は母馬の茶いろな瞳を、ちらつと横目で見られましたが、俄かに須利耶さまにすりついて泣き出されました。けれども須利耶さまはお叱りなさいませんでした。

で、自分の袖で童子の頭をつつむやうにして、馬市を通り過ぎてから河岸の青い草の上に童子を坐らせて杏の實を出しておやりになりながら、しづかにおたづねなさいました。(お前はさつきどうして泣いたの。)

(だつてお父さん。みんなが仔馬をむりに連れて行くんだもの。)

(馬は仕方ない。もう大きくなつたからこれから獨りで働くんだ。)

(あの馬はまだ乳をのんでゐたよ。)

(それはそばに置いてはいつまでも甘えるから仕方ない。)

(だつてお父さん。みんながあのお母さんの馬にも子の馬にもあとで荷物を一杯つけてひどい山へ連れて行くんだ。それから食べ物がなくなると殺して喰べてしまふんだらう。)

須利耶さまは、何氣ないふうで、そんな成人のやうなことを言ふもんぢやないと仰つしやいましたが、本當は少しその天の子供が恐ろしくもお思ひでしたと、まあさう申し傳へます。

須利耶さまは童子を十二のとき、少し離れた首都のある外道の塾にお入れなさいました。童子の母さまは、一生懸命機を織つて、塾料や、小使やらを拵らへて、お送りなさいました。

冬が近くて、天山はもうまつ白になり、桑の葉が黄いろに枯れてカサカサ落ちました頃。ある日のこと、童子が俄かに歸つておいでです。母さまが窓から目敏く見付けて出て行かれました。

須利耶さまは知らないふりで寫經を續けておいでです。

(まあ、お前は今ごろどうしたのです。)

(私、もうお母さんと一緒に働かうと思ひます。勉強してゐる暇はないんです。)

母さまは、須利耶さまの方に氣兼ねながら申されました。

(お前は又そんなおとなのやうなことを言つて、仕方ないではありませんか。早く歸つて勉強して、立派になつて、みんなの爲にならないといけません。)

(だつておつかさん。おつかさんの手はそんなにガサガサしてゐるのでせう。それなのに私の手はこんなんでせう。)

(そんなことをお前が言はなくてもいいのです。誰でも年を老れば手は荒れます。そんな事より、早く歸つて勉強をなさい。お前の立派になる事ばかり私には楽しみなんだから。お父さんがお聞きになると叱られますよ。ね、さあ、おいで。) と斯う申されます。

童子はしよんぼり庭から道に出られました。それでもまた立ち停つてしまはれましたので、母さまも出て行かれてもつと向ふまでお連れになりました。そこは沼地でございました。母さまは戻らうとして又、

(さあ早くおいで、早く。) と仰つしやつたのですが、童子はやつぱり停つたまま、家の方をぼんやり見て居られますので、母さまも仕方なく又振り返つて、蘆を一本抜いて小さな笛をつくり、それをお持たせになりました。

童子はやつと歩き出されました。そして遙かに冷たい縞をつくる雲のこちらに、蘆がそよいで、やがて童子の姿が、小さく小さくなつてしまはれました。

俄かに空で羽音がして、雁の一行が通りました時、

須利耶さまは窓からそれを見て、思はずどきつとなされました。

さうして冬に入りましたのでございます。

その厳しい冬が過ぎますと、まづ楊の芽が溫和しく光り、沙漠には砂糖水のやうな陽炎が徘徊いたします。杏やすもの白い花が咲き、次では木立も草地もまつ青になり、もはや玉髓の雲の峰が、四方の空を繞る頃となりました。

ちやうどそのころ沙車の町はづれの砂の中から、古い沙車大寺のあとが掘り出されたとのことでもございました。一つの壁がまだそのままで見付けられ、そこには三人の天の童子が畫かれ、ことにその一人はまるで生きたやうだとみんなが評判しましたさうです。

或るよく晴れた日、須利耶さまは都に出られ、童子の師匠を訪れて色色禮を述べ、又三卷の粗布を贈り、それから半日、童子をつれて歩きたいと申されました。

お二人は雑沓の通りを過ぎて行かれました。

須利耶さまが歩きながら、何気なく言はれますには、

(どうだ、今日の空の碧いことは、お前がたの年は、丁度今あのそらへ飛びあがらうとして羽をばたばたいはせてゐるやうなものだ。)

童子が大へんに沈んで答へられました。

(お父さん。私はお父さんをはなれてどこへも行きたくありません。)

須利耶さまはお笑ひになりました。

(勿論だ。この人の大きな旅では、自分だけひとり遠い光の空へ飛び去ることはいけないのだ。)

(はいえ、お父さん。私はどこへも行きたくありません。そして誰もどこへも行かないでいいのでせうか。)

とかういふ不思議なお尋ねでございます。

(誰もどこへも行かないでいいかつてどういふことだ。)

(誰もね、ひとりで離れてどこへも行かないでいいのでせうか。)

(うん。それは行かないでもいいだらう。) と須利耶さまは何の氣もなくぼんやりと斯うお答へでした。

そしてお二人は町の廣場を通り抜けて、だんだん郊外かくわいに來られました。砂がすうつとひろがつて居りました。その砂が一とこ深く掘られて、澤山の人がある中に立つてございました。

お二人も下りて行かれたのです。そこに古い一つの壁がありました。色はあせてはゐましたが、三人の天てんの童子どうじたちがかいてございました。

須利耶さまは思はずどきつとなりました。

何か大きな重いものが、遠くの空からぱつたりかぶさつたやうに思はれましたのです。それでも何氣なく申されますには、

(なる程立派なもんだ。あまりよく出來て、なんだか恐いやうだ。この天童てんどうはどこかお前に肖にてゐるよ。)

須利耶さまは童子をふりかへりました。そしたら童子はなんだかわらつたまま倒れかかつてゐられました。

須利耶さまは愕おどろいて急いで抱き留められました。

童子はお父さんの腕の中で夢のやうにつぶやかれました。

(おぢいさんがお迎へをよこしたのです。)

須利耶さまは急いで叫なべられました。

(お前まへどうしたのだ。どこへも行つてはいけないよ。)

童子が微かすかに言はれました。

(お父さん。お許し下さい。私はあなたの子です。この壁は前にお父さんがかいたのです。)

人人が集まつて口口に叫なびました。

(雁かりの童子どうじだ。雁の童子だ。)

童子はも一度、少し唇くちびるをうごかして、何かつぶやかれたやうでございましたが、須利耶

さまはもうそれを、お聞きとりなさらなかつたと申します。
私の知つて居りますのはただこれだけでございます。」

老人はもう行かなければならないやうでした。

私はほんたうに名残り惜しく思ひ、まつすぐに立つて合掌して申しました。

「尊いお物語をありがとうございました。まことにお互ひ、ちよつと沙漠のへりの泉で、お眼にかかつて、ただ一時、一緒に過ごしただけではございますが、これもかりそめの事ではないと存じます。ほんの通りがかりの二人の旅人とは見えますが、實はお互がどんなものかもよくわからないのでございます。いづれはもろともに、善逝の示された光の道を進み、かの無上菩提に至ることでございます。それではお別れいたします。さやうなら。」
老人は黙つて禮を返しました。何か言ひたいやうでしたが黙つて俄かに向ふを向き、今まで私の來た方の荒地にとぼとぼ歩き出しました。
私も又、丁度その反對の方の、さびしい石原を合掌したまま進みました。

版權所有



印章は著者の自刻
遺愛のもの

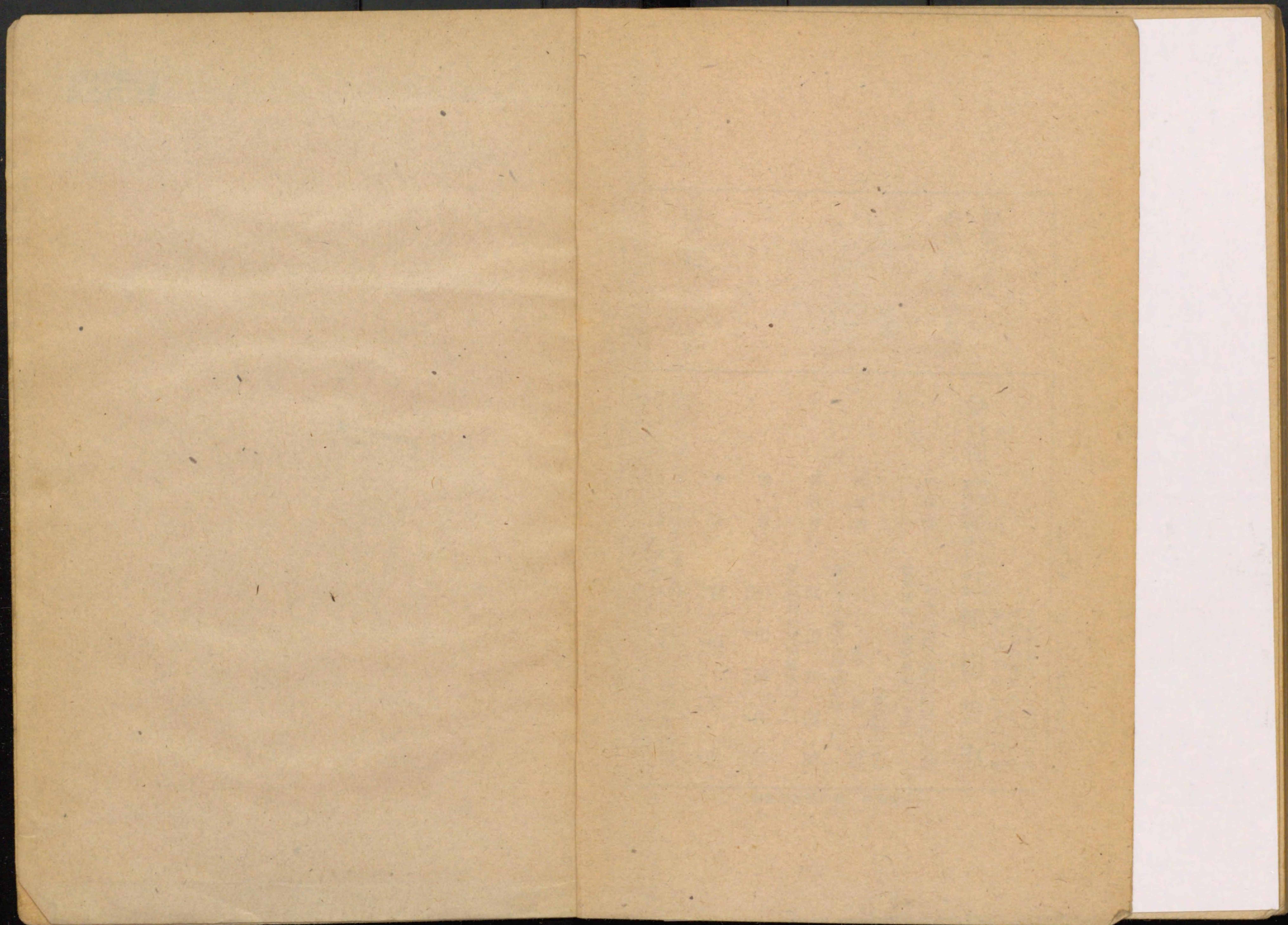
昭和十四年三月三日印
昭和十四年三月七日第一刷發行
昭和廿一年七月廿日第十二刷發行

宮澤賢治名作選
定價拾四圓(羽田)

| | |
|-----|---|
| 著者 | 宮澤賢治 |
| 編者 | 松田甚次郎 |
| 發行者 | 東京都神田區神保町二ノ一 羽田武嗣郎 |
| 印刷者 | 東京都下谷區上野山下町二 川上貞司 (東京三二七) |
| 配給元 | 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給統制株式會社 |
| 發行所 | 東京都神田區 神保町二ノ一 株式會社 羽田書店 電話九段(33)一五一五番 振替口座東京七八二六六番 會員番號A一〇八〇二三號 |

(本製塚貝 刷印會濟弘道鐵)

(落丁・亂丁に對しては責任を負ひます)

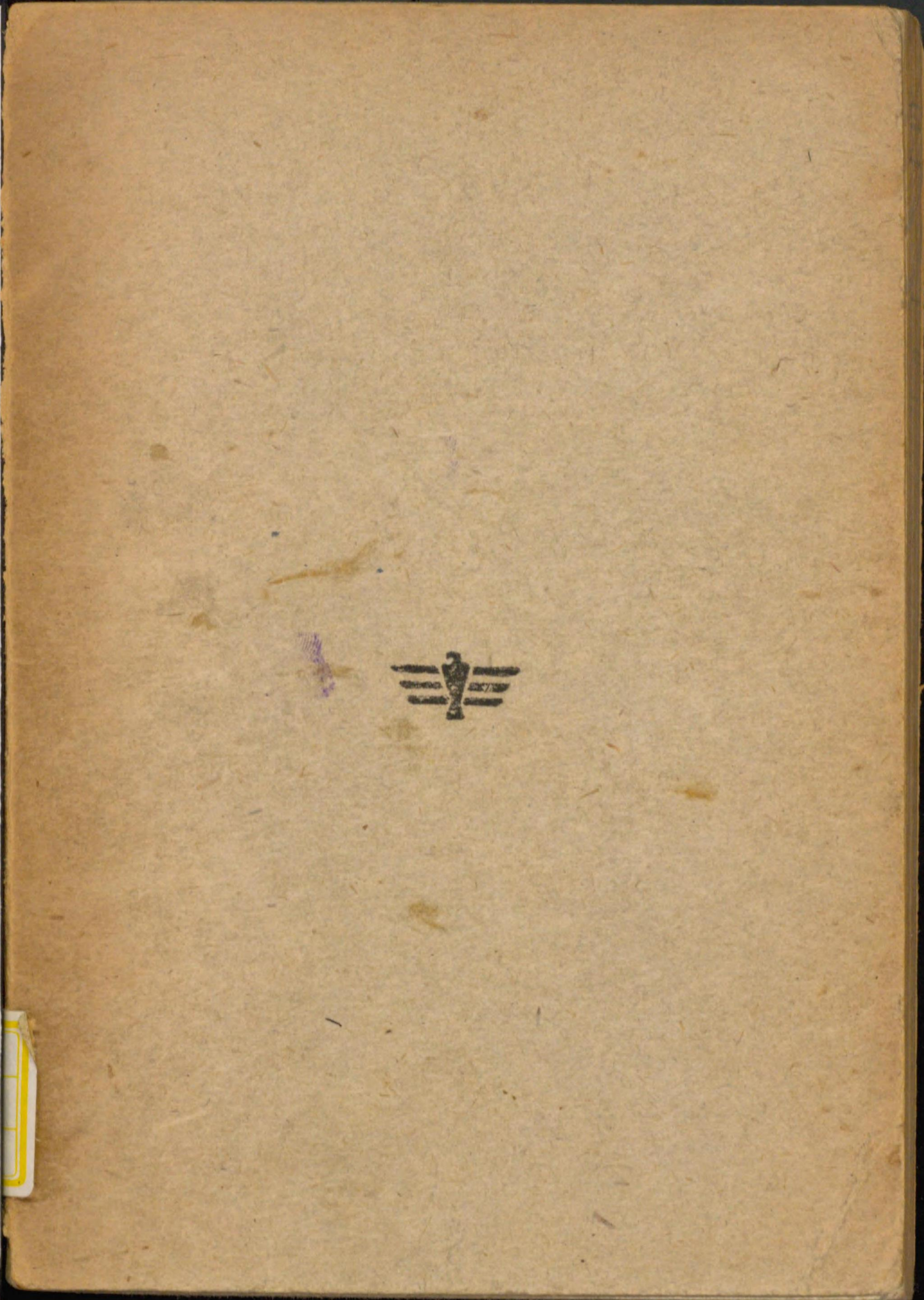


763
104

22年1月25日 127

| | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

閱覽清

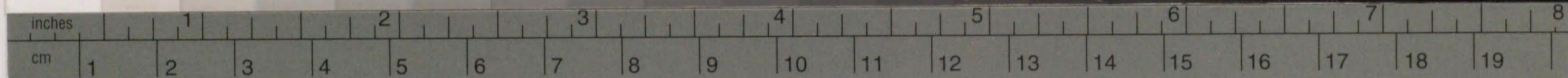


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

